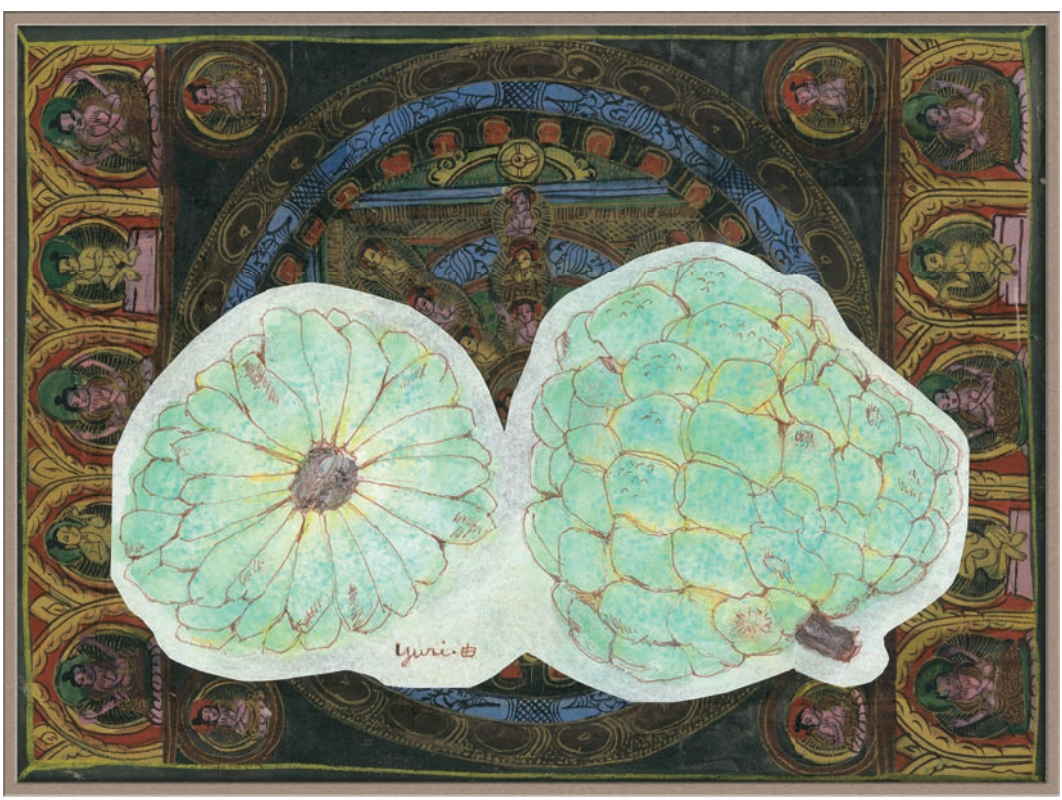
三河アララギ

平成三十一年　2019年

二　月　号

第六十六巻　第二号



ニューヨーク日記（148）

http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

5 Hours in Madrid

Blue Shoe Diaries

いきなりモナコに行くことにしたんだけどちょっと5時間ほど飛行機で途中下車！マドリッドでお昼ごはん！ 結構街をうろうろする時間があってちょっと前から気になっていたバスク風のタパスのおみせTxakolinaにたちよってみました！ ん～やっぱりおいし～ここに来る前にもグルメマーケットによってイベリコハムのサンドイッチも食べちゃった。やっぱりスペインは美味い！

Last minute travel to Monte Carlo, Monaco! But first things first. I’ve got to enjoy my 5 hour layover in Madrid. So off I go to town in search of some good food! Made a stop at the market and got the most simple yet most amazing jamon Iberico sandwich. Then I made my way to a Basque tapas joint that I’ve been wanting to go called Txakolina. It certainly did not disappoint! Had some tapas and Txakoli and was quite sad to leave Spain, the food mecca of EU so soon. I’ll be back!

目次

第六十六巻第二号（通巻七八二号）

表紙・チェリモヤ　今泉　由利（1）
ニューヨーク日記（148）　Blue Shoe（2）
黄素馨の門　御津　磯夫（4）
三河アララギ歌集Ⅵ　大須賀寿恵（5）
歌集「續草々」　今泉　米子（6）
三河アララギ歌集Ⅵ　河原　静誠（7）
ほの白さ　岡本八千代（8）
世界遺産　弓谷　久子（10）
南十字星　今泉　由利（12）
「おはよう」　安藤　和代（13）
絆　清澤　範子（14）
行く、ゆく、逝く　伊藤　忠男（15）
もみじ狩り　白井　信昭（16）
達筆　森岡　陽子（17）
小山田地蔵　杉浦恵美子（18）
ダチュラ　山口千恵子（19）
廻り道　阿部　淑子（20）
春は迎へるもの　夏目　勝弘（20）
『ことよせ』　いーはとぶ
森　厚子（22）
山崎　俊子（22）
三田美奈子（22）
水野　絹子（22）
牧原　規恵（22）
稲吉　友江（23）
鈴木美耶子（23）
吉見　幸子（23）
牧原　正枝（23）
石田　文子（23）
現代学生百人一首　東洋大学
佐藤こころ（24）
島井杏里沙（24）
荻原　菜七（24）
堀田　夏生（24）
山口　洸明（25）
森川　慧（25）
小林　真歩（25）
大河原咲良（25）
贈呈誌
森岡　陽子（26）
黄色菜の花　日暮れ菜の花
高橋　育郎（28）
山迫　京子（30）
山元　正規（30）
森岡　陽子（30）
松本　周二（31）
今泉　由利（31）
田中　清秀（31）
浜田　紀政（32）
柳田　晧一（32）
今泉　如雲（32）
植村　公女（33）
杉浦　弘（33）
田中　清秀（34）
丸山酔宵子（36）
江上　浩二（38）
山本紀久雄（40）
今泉　雅勝（42）
平井　茂行（46）
芭蕉は、恋の名手だった？　中屋　保之（48）
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬　本田　勇気（50）
「新しい経験」　大橋　望彦（52）
白隠さんの和歌　鈴木　孝雄（54）
御津磯夫短歌鑑賞　鮫島　満（56）
「氷魚」のことから（217）　岡本八千代（57）
編集室だより〔二〇一八年十二月〕　今泉　由利（58）
野菜・まんだら（12）　（59）
「三河アララギ」について　（60）
『俳句』
かさね吟行会
『酔いの徒然』（82）
「江上浩二の独り言」
楽しい時間（75）
絹の話（99）
漢詩研修（二十八）

黄素馨の門（昭和四十一年～昭和四十四年）

御津磯夫

覆ひ岩もれくる光ひとすぢにほそきななめのたまゆらの岩
雷の丘の方へをふりさけて秋の竹むら山はのこれり
甘檀の丘といへども遊覧にうへ平めしを見て立ちよらず
元伊勢によぎらむ道にバスよけて南瓜捨てある飛鳥川のぞく
趨(よ)りすぐる左側にて光なき劍の池の水低かりき
記憶ある水の面とも杜かげに黝(くろ)きつるぎの池といひつつ
住みふりし家とも人らとも見えず街どぶ川に名のみとどむる
大阪の子にゆかむ時をはかりつつわれは歩まず明日香の道を
黄葉(もみぢば)のみだれて散るを消極の美とせしはのちの代の風流ならむ
秋山に照れる黄葉にけふあひてみちみつる明日をおもひねがはむ

三河アララギ歌集Ⅵ

大須賀寿恵

寺の庭の木立に囁き合ふ目白あり洗ひし白き下着干しつつ

今年まだ鶯(うぐ)なく声を聞かざれどリラの蕾のふくらみにけり

新しく分家して来てより十八年俎板の減りにおもひいだしぬ

ただ前を見つめての如き七十四年思ひ出などは無きごとくして

浅蜊貝珍味貝などの殻多し埋立てられて死にし貝の殻かも

打ち寄する潮は澄みゐて潮の底の貝殻白じろと見えゐるあはれ

梅花空木の小さき緑の尖り芽に降りそそぐかなけふ木の芽雨

大き鉢にと植ゑ替へにけり来年もと心に恃む小さきポロニア

わが部屋に午後の日の光ゆらぎつつ畳みてをりぬ洗濯物を

よたよたとゆらぐ歩みに畑にゆき甘夏柑の落ちしを拾ふ

歌集「續草々」

今泉米子

オリオンの南の方に輝ける一つの青き星の名知らず

窓ガラスはげしく撃ちて白き毛羽を散らして消えし小鳥のゆく方

棕櫚竹に風わたりつつ成田よりいま発ちゆくと知らせ来にけり

花時の少しおくれて花年の花穂かさなるくれなゐ馬酔木

外来のやうやくすみて坐るなり老紅梅のふふめる縁に

赤道をこえ帰りゆく子ら居りてあたかも金絲のまんさくの花

コツコツと音たてて浅蜊の煮えはじむ啓蟄といふ日の朝ぐもり

萌え出づる稚子花の鉢を引ずりてものの影なきところへ移す

生きてあらばまた来年もとどけむと言ひつつにほふ杏の花を

櫻の花ひとはな綻びゐるといふ聲に出でゆく夕べの庭に

三河アララギ歌集Ⅵ

河原静誠

保護眼鏡はづして鏡に映る顔充血残りて赤き目の顔

竹林の傾き揺らぐ路の上に最上川くるみが音たてて落つ

土色の最上川くるみはからからと音して鳴るよ吾が掌の内に

四十糎にきめたる歩幅にて歩みゆく行在宮跡の歌碑を目指して

玉袋と剣と御所と三つの橋通り過ぎつつ万歩あゆまむ

ゆるゆると緑のらせん解くる見て真白き夜顔の花開きゆく

一閑人の蓋置は井戸を覗きをり水旨かりき十王子の井戸

アララギの父なる文明先生ああ臘八に逝きたまひたり

在すが如く白妙のダチュラの花捧ぐ藍美はしき祥端の壷

教学講習を受けし御寺に討論ありさやかになびくは若竹の笹

ほの白さ

蒲郡　岡本八千代

けふの日の障子にさしくるほの光ほのぼのとしてそのほの白さ

南(みんなみ)の障子にさしくるほのひかりこの部屋にゐてもの書かむとす

遺影にも声かけて言ふ美しき障子を透かす淡き陽の白さ

一年(ひととせ)の忽ち過ぎつつはや新年君は天路(あまぢ)のいづくに在すか

君を呼び呼べども答のなきままにつひに一年のすぎゆきにつつ

そのうちに吾も天路へ行くことよ君がゐるからさぞや愉(たの)しか

果てしなき冬の深(み)空を仰ぐなり仰げばなぜか力湧くごと

ま夜中に未だ起きてゐるわれにしてあつあつ甘酒のひとり酒かな

カップ一杯の甘酒呑みてなんとなく楽しくなりたるごとき老ゆらく

目の前に銀杏（イチョウ）の黄（きい）の葉散りにつつ美しきかなやその黄金色（こがね）

けふありて昨日のことを思ひ出し寂しくなりて家に入りたり

今にこそわが行く末は思はざり淡々として過ぎてゆくまま

実篤の「日日是好日」の色紙をば冬の玄関に飾りおきたり

何ごとも「是好日」とわれも同感しばらくこれを飾りておかむ

何ごともあまり深くは考えず夕餉の支度にわが化学室へ

世界遺産

豊川　弓谷久子

日曜日今宵は毎週楽しみの世界遺産をテレビにて見む

小さき町に一生過ぎたり週一度テレビのなかにて世界をめぐる

さまざまの世界をテレビは映しをり世界遺産に我を忘るる

大根も蕪も愛らし裏山に鍬ふる姿目に浮かび来る

ふんわりとシフォンケーキを子が切り分ける今日はみさとの誕生日

共稼ぎの娘に代りて育みし日もはるかなり思いは深し

「この話前にもした事あったっけ」日向の縁に子と他愛なし

ほっこりと日だまりの中老猫のジュリーも並ぶ座布団の上

手作りの手さげ袋を差上げむ今年も柚子をくれゆく人に

柚子いっぱい浮かべし風呂の香の中で一刻心も身もゆるみたり

硝子戸を鳴らして木枯し吹き止まず寒き一日の夕日は赤し

子の編みしサンタクロースの編みぐるみ飾りてささやか我が家のイブ

はやばやと子より届きぬローストチキン我の好みのモンブラン

回転寿司をと我が望みし忘年会家族揃ひぬ満ち足りし昼

正月にと白菊の花貰ひたり夫の墓へと供えてやらむ

南十字星

東京　今泉由利

白亜紀より今に繋ぐるペンギンの剥製一羽私とゐる
窓の辺の今朝の雀のスリムにて外気温を眼に測り
三人のマリア様とふオリオン星座私一世の安心なりき
慣じみつつ暮せし日々のありしこと南十星をまた見むとする
また来たり一万メートル上空へ南十星に少し近づく
雨が降る青空見ゆるまた小雨石垣島の午後のしじまに
今咲かむハイビスカスの蕾ですからりと揚がり天麩羅ですよ
雲厚く空の彼方のひとところ心には見ゆ南十字星
さりげなく野生の蘭の小花咲く川平湾を見下ろす丘は
幾粒かポケットにあり星の砂あのことこのこと思ひの湧き来

「おはよう」

豊川　安藤和代

「おはよう」と遺影の夫にことばかけ温き茶供えて今日の始まり

本宮と吉祥山と石巻の山に囲まれ吾が家安泰

日短かな庭に咲きいるパンジーに日あしを追って位置を変えやる

老犬が夜半なき出せばヨロヨロと頭なでやり毛布かけやる

長生きはしたくない等と思いつつ「えごま」「鯖缶」今日も求めり

スーパーの売り出しの声風にのり草抜く庭まで届きて師走

朝冷えの枯葉の中に蟷螂の枯れ葉の色になりて動せず

おでんなべ温めぬくめて帰り遅き孫子を待ちつ聞く深夜便

朝寒むの庭にクークー鳩の二羽胸ふくらませ歩み小さし

生活の高きは望まずこのままの暮しつづけと向日葵を蒔く

絆

春日井　清　澤　範　子

吾が歩くリハビリの道に堤防あり今日は水面に茶鴨泳げり
住宅を出て小滝まで千m往復するにわれは疲れき
神経質と言われし吾は自転車に乗りても重心くずれてしまふ
夫の育てしジャガ芋料理は色々と肉ジャガに始まり肉ジャガに終る
鏡みて笑ひて見るよ歯の並び型とり入れてうれしき心
師走も早や中ば過ぎたれば年末年始の予算見積る
ブレーキ引き車降りればわが娘さっと吾の手握りてくれる
娘の手握り返せば温かく親子の絆な通ひ合ひたり
娘は手を上げて見送くる今朝寒し買ひたるコート暖かく着て
娘は手を振りて角を曲るまで見送る吾にこたえて行きぬ

行く、ゆく、逝く

大阪　伊藤忠男

行く年を追わず来る年淡々と藪に棘の道まだ続く
過ぎし時振り返るとも何得るや楽しみあるは明日の明日なり
平成の新し響き今は過去昭和はもはや過去の過去なり
平成の棋士も無冠に時変わる楽しみ半ば不安も半ば
災いの年に慣れたか災いの年とは言えぬこそが災い
フランスにイギリスドイツ揺らぐ暮れ芽吹く保護主義引き継かずとも
寒波には慣れぬ体か震える日乾いた風に咳喉荒れる
この年も半端ないからそだねMe too災で締めたる当たり年なり
朝焼けは雨の兆しも西の空晴れ澄み渡るこれも異変か
暖かさなのか空には迷い雲変幻うろこクロダイの色

もみぢ狩り

豊川　白井信昭

ここよりは東海環状自動車道紅葉(もみぢ)狩りと美濃方面へ
恵那峡の木曾川にかかる赤き橋奇岩絶壁の上今渡りゆく
北側より南アルプス連峰を遠く望めるここ展望台
虎渓山永保寺開山佛徳禅師御手植銀杏樹齢七〇〇年と
本堂の前に一本聳えたつ銀杏黄葉は青空に映ゆ
本堂を黄に彩り聳えたつ銀杏黄葉(もみぢ)のはらはらとまう
山合いの道をぬい来て久しぶり香嵐渓(こうらんけい)に今し着きたり
午後の陽は山に照り映え飯盛山(はんぜいさん)いろはもみぢの錦なりけり
南朝の後醍醐帝の救援に善戦むなしく笠置山に死す
枝おれて治されし跡(あと)傷ましきヒマラヤザクラ咲き残りおり

達筆

東京　森岡陽子

ふと目覚む夜中に思う兄弟や友人達との絆いつまで
並木道どの木の葉々も散る中で赤い実つけた際立つ花水木
青鷺は不動の池に飛び降りてわが物顔でカラス脅かす
達筆なババ友からの手紙来て肩身の狭い字で返事書く
友人はデザートの如薬のむ赤黄白錠色まるで果物
枯葉降り枯葉の香る公園の端のふきだまり猫ゴロゴロす
庭園の池の端には返り花つつじの白花水仙咲き初む
こさめ音と木の葉の降る音耳にして第九を聞きに上野公園
華やかなスカイツリーのクリスマスベビーカーぽつりパパママ何処に
愛犬はとっても好きなトリマーに真赤なリボンベルで御洒落

小山田地蔵

蒲郡　杉浦恵美子

背伸びしてぎりぎり電球付け替へぬこんな作業に溜息ひとつ
鎌倉の長谷観音の見晴台我が家より見る三谷同じ風景
我が知らぬ母の述懐偲びつつ小山田地蔵にひとり詣でぬ
花柚子がほんのり香る我がクルマ山ほど貰ひて帰り来る途
花柚子を如何に使はむ先づは寿司小さき実なれどたっぷり果汁
レンチンとレシピに云へりこの略語一寸気おくれ柚子ジャム作り
我が庭の冬は意外に賑はへり枯れ残りたる菊また楓
白菊が赤紫に変はりたり平成最後と喧しき中
注文を受けて最中に餡入れて差し出し呉れぬ甲賀の和菓子屋
出来立てを食めば最中の皮ぱりぱり餡はねっとりこれこそ最中

ダチュラ

豊川　山口千惠子

こともなく風なく静かな一日なり十一月尽の日暮れの早し
山茶花の紅の花びらまじりつつ掃き寄せてゆく庭松の落葉
朝いつも同じリズムに鳴く烏角の電柱の天辺に止まりて
紅の小花咲かせるシレネの種蒔時遅れし芽生えを待てり
緑葉の繁れる中に二三（にさん）本つぼみ下がれり十二月のダチュラ
賽銭の一円玉光りころがりて秋葉神社の小さき社
当番の御灯明をあげに行く秋葉神社に蝋燭二本
秋葉様のお札一枚もらひつつ今日のおひまちお開きとなる
花の縁ちぢれて色の変はりつつわがダチュラ咲く寒さの中に
今年又注連縄とどけくだされし少し早目に玄関に掲ぐ

廻り道

豊川　阿部淑子

時見つけ爪先立ちや踵上げこまめに養生膝裏伸ばす
会話中にひょいと名詞が出ぬ時は廻り道してつじつま合わす
手にスマホ歩きながらの人人斜視が増えたと医者は警告
幾とせも互いに睦みし大社宅解体進みて山茶花（さざんか）淋し
新たなる建売り建築進みゆき路端に抜かれし木々の根乾きて

春は迎へるもの

豊川　夏目勝弘

真っ赤かの帽子も冠らずたちまちに喜寿そして傘寿も通過
老人の多きが社会問題とか構はず我は百歳を目差す

炬燵にてただ居るのみにても新玉の年は来たりてたちまちに過ぐ

両足もて歩き歩みて年の瀬を渡りて新年を迎へに行かん

ようやくに大晦日となり十数坪の屋敷の草を取り終へにけり

雑草の名前を呟きつつ取りてゆく坐り葉多きに手古摺りながら

ホトケノザの細き紅（くれない）と白花小さきハキダメギクが庭の冬の花

仏という名の付きゐるも構はずにホトケノザは引き抜きにけり

彼岸花の球根をあまた植ゑおきしに冬の緑葉繁り繁れり

春までも繁り繁れる彼岸花の濃き緑葉はとみによきもの

五センチ余のその草丈に小花を付けしハキダメギクは冬を越せるや

与へられし生命（いのち）を懸命に生きてゐる我は全ふできるや否や

『ことよせ』

（西浦公民館　いーはとぶ）

金枝花（エニシダ）に金木犀（キンモクセイ）にいやされし刻をおもひつけふの狭庭辺　森　厚子

蘆山寺の庭の向かうの紅葉（モミヂ）黄葉（モミヂ）去年のことおもふ狭庭辺のけふ

遠き日に伯父の描きし曼珠沙華画布一面のその赤妖し　山﨑俊子

海遠く船の上なる漁夫の影ぼんやりながむる砂浜の我

背戸たたく空っ風の音聞きにつつ雪平鍋に粥炊く夕べ　三田美奈子

幾たびもあのショベルカーは御辞儀して吾が友の家毀たれてゆく

奥矢作の放棄田の面は秋の色今日吹く風のいよよ冷たし　水野絹子

懐しきあの日の伯母の手の温もりメリケン波止場は夕光（かげ）の中

だんだんに敷布団の数減りてゆくかつての正月の賑やかなつかし　牧原規恵

車小さく乗り零れたるは常にわれ娘はつひに七人乗り買ふ

もみぢ葉がフロントガラスに舞ひ落ちつつ静かに密かに冬に入り来る
絵手紙の作品展に友と来し葉書の中のウリ坊跳ねをり

稲吉友江

息子らとお盆の今宵撮る一枚誰よりも私嬉しき心
この佳き日ロイヤルブルーのドレス着る似合ふよと夫言ひてくれたり

鈴木美耶子

「喫茶去」と書かれし掛物床に掛け茶花は庭の石蕗の花
炉開きの釜鳴りの音聞きをりぬわれら三人の一期一会よ

吉見幸子

十一人の子供育てし与謝野晶子艶やかな声テープに聞きつつ
三重の堀の正面に道かかる原生林のごと仁徳天皇陵よ

牧原正枝

雲厚くわづかにのぞく青空に飛行機ゆくか音のみ聞こゆ
久々に友らと集ふ食事会夫を亡くせし友慰めり

石田文子

現代学生百人一首

東洋大学

クラスの子話してみたくて手をのばし勇気がなくて空気をつかむ

横浜市立六ッ川中学校二年（神奈川県）佐藤こころ

不安だなそんな自分をシャープペンが一人じゃないと見守っている

鎌倉市立手広中学校三年（神奈川県）島井杏里沙（しまいありさ）

スカートの長さで決まる女子力とクラス内での自分の居場所

神奈川大学附属中学校一年（神奈川県）荻原菜七（おぎわらなな）

田舎町一人で暮らす祖父を見て次の休みの予定を空ける

神奈川大学附属中学校二年（神奈川県）堀田夏生（ほったなつき）

いつまでも手から離れぬスマートフォンどんどん時間を吸い取ってゆく

慶応義塾普通部一年（神奈川県）　山口　洸明

押しよせる漢字と年号耐えきれず頭の中で徳政一揆

慶応義塾普通部三年（神奈川県）　森川　慧

微生物培養したら可愛くて愛着がわく農業ガール

神奈川県立平塚農業高等学校三年　小林　真歩

通じ合う「よう」と「じゃあな」で帰り道いつもでてこない二文字の言葉

鎌倉女学院高等学校三年（神奈川県）　大河原　咲良

贈呈誌

冬雷一〇一七作品年鑑十自選合同歌集

森岡陽子

○横たはり眠る姿勢がただ楽と窓越しの日を頬にうけをり　赤羽佳年

○形状記憶後糸を解きて広げれば我が意図したものと違ふ仕上り　赤間洋子

○刈られたる川原は忽ち青々と草の伸びゆきトンボ飛び交ふ　有泉泰子

○苔むして太き幹なり芭蕉の見し柳は代を引き継ぎて生く　桜井美保子

○愛といふ字を中心に幾万の言葉が円を作る美しさ　冨田眞紀恵

○引っ張られ足拡げたる干だこは寒風にふるへ晒され揺れる　三木一徳

冬雷1月

○さとう丸はちやひら柿ぜんじ丸数多実りし遠き日の実家　山﨑英子

○多摩川にひろひてきたる石ひとつ玉となりゆく日ごと摩れば　天野克彦
○後ろより差しくる朝日の映す影はみ出す髪を撫でながらゆく　江波戸愛子
○静かなる雅楽の響きはいつしかに母懐に帰る心地す　酒向陸江
○夕日背に手の平ほどに土焦がし女ばかりの迎へ火を焚く　田端五百子

鹿児島アララギ12月号

○台風の潮風浴びて葉の落ちし木立も芽吹く名は知らねども　堀之口ふさえ
○力強く練りゆきし大き注連縄の仕上り誉めつつ共にお茶飲む　森枝むつ美
○くもの巣にもがくトンボを解き放てば光る糸ひき飛び去りゆきむ　千葉源治
○暖かき日差しを浴びつつ石垣の草引けば背の温もりて来ぬ　奥悠子

高橋育郎 作詞

黄色　菜の花

日暮れ明るい
菜の花畑
咲いてる　咲いてる　花いちめん
月が出ている　白い月だな
黄色くなあれ

月を染めるよ
黄色く染める

日暮れ　菜の花

日暮れ　菜の花
月が出る
白い月だな
黄色くなあれ

こどもが　帰って
静かだな
家の灯りも

菜の花　菜の花　ふるさとの花
心も染まる　想い出の色
黄色い光

家の灯りも
黄色くともり
みんななかよく　帰っていくよ
月は高いな　森かげ遠く
鐘の音しずか

黄色くなって
月は染まるよ　森の上
お寺の鐘が　ひびいてる

ふるさと遠い
思い出の色

『俳句』

数へ日や二時間待ちてふ美容院　山迫京子

喜怒哀楽はこの世の常や山眠る

ショートケーキ二個の二人の降誕祭

落石の音遠くして谷凍つる　山元正規

風花や太古に戻る空の色

生きよとの妻のまなざし冬の星

病棟へ向かふ廊下に日脚伸ぶ　森岡陽子

数へ日や湯呑みを一つ買ひ求む

数へ日の急ぎ印押す回覧板

吾が丈を隠す枯野や雲低し
凍星や走り抜けゆく救急車
笹鳴きや去年と同じ通り道

松本周二

御降（おさがり）に共に濡れをりシーサーと
熱燗のつまみに海の白クラゲ
山椒と昆布と梅干大福茶

今泉由利

数へ日や声を限りのオラトリオ
約束の墓参済ませて年の暮
実万両亡き師愛でたる石の庭

田中清秀

雨に濡るる古刹の庭の花八つ手
冬ざれの坂を過ぎりし古都の栗鼠
終電にゆらり揺らるる忘年会

浜田紀政

きらきらとさざなみたつや冬の池
数へ日やきらめく星を仰ぎ見て
年の瀬や優先席は我が席に

柳田晧一

雪深し大鰐といふ小さき町
冬ざれの三厩行きの終列車
トンネルを抜けるや雪の津軽野に

今泉如雲

譲られしベンチの温み冬木立
黒白をつけたき日なり大根引く
黒猫のゆったりと行く冬紅葉

植村公女

まっさらの富士近々と風光る
落椿滝のひびきはとこしなへ
大宇陀の茶摘み終へたる畝の色
恥も捨て外聞も捨て着膨れる
暮れ暮れに椀ぎて入れたる柚子湯かな
竹の節に雪つもりけり眉の形

杉浦　弘

かさね吟行会
「清澄庭園」　十二月

田中清秀

英国のキッチナー元帥は明治四十二年十一月二日、エドワード七世の名代で来日した。この時日本側から熱狂的な歓迎を受け、芝紅葉館では東京市長や陸軍大臣などが臨席した大歓迎会が催されたと言われる。そして、岩崎家は彼をもてなすために清澄庭園内にわざわざ涼亭を建てて接遇している。岩崎家の当主は彌太郎の嫡男久彌、涼亭の設計は保岡勝也で銅板葺数寄屋建築の平屋建て二十七畳の和室である。ただ、建築当時は茶亭として履き物は脱がずに上がり、床には絨毯を敷きガラス戸で囲んでいたらしい。現在、東京都の選定歴史的建造物に指定され大震災でも残り、今も優雅で美しい姿をとどめている。

師走の迫る平成三十年十二月十四日、この涼亭のある清澄庭園を吟行した。今回は通算で五回目の訪問になるが何度来ても見飽きない。日本庭園と池そして由緒ある建物さらに多くの名石など、見るたびに新たな発見が有る。

隅田川の水引き入れて都鳥　由利
涼亭をそびらに石の冬景色　陽子
燈籠に羽根休めぬる都鳥　さち子
小名木川芭蕉見上ぐる冬の月　紀政

さて、庭園内の散策を始めよう。赤御影の大きな手水鉢と佐渡の貴重な赤玉石が貞明皇后の葬儀殿を再建した大正記念館の脇に庭石として無造作に置かれている。庭園の東眺めは富士山を模した盛り土と瀧石、中央眺めの中心は池に浮き建つ涼亭、西眺めは雪見灯籠と四阿の傘亭である。広々とした落ち着きのある江戸庭園の名残の庭である。また、ここの池は淡水で餌が豊富なこと、また禁猟区であることから多くの野鳥が飛来する。主（ぬし）のようなアオサギ、群れを成すキンクロハジロやマガモの作る鴨の陣、優雅に飛来するユリカモメ、そして運が良ければカワセミやルリビタキを見ることもきる。野鳥観察も見飽きない。植木ではケヤキやカシのほか圧倒的に黒松が多いが、中ノ島には赤松の銘木が植えられている。

浮寝鳥覚めてをちこち遊びおり　素山
夕去りてくぐもり増しぬ鴨の声　清秀
日暮れつつ大きくなるや鴨の陣　浩一

その中の一羽は見張り浮寝鳥　　京子

池の周りは岩崎弥太郎が自ら考え石積みをしたと伝えられる大沢渡りの大石、これは伊予・紀州産の緑色片岩の青石で設え日本最古のセメントが使用されているとのこと。また、長瀞を模した幾つかの細長い奇岩も力強く優美に配され見応えがある。意外と見過ごしがちだが、富士山の裏側には粗末な祠があり四体の石仏が置かれている。馬頭観音と地蔵菩薩の野仏が鎮座しおり、三百年前の野仏らしくこれも珍しい。

細長き影を道づれ冬の園　　れい子
野仏の微笑んでゐる石蕗の花　　周二
風撫づる水面に石蕗の花明り　　正規

夕闇せまる中、明かりの灯る涼亭の遠景は池面のその清楚で優雅な佇まいを写し、訪れる人を魅了する。四阿に座り夕刻の宴席を待ちながら遠く明治の時代に思いを馳せる。国賓として大歓迎を受けたキッチナー元帥の宴はどのようなものであろう。燕尾服とドレス姿の貴婦人、そして優雅な音楽、その豪華さが目に浮かぶようだ。ただ、夏目漱石はその作品の「門」の中で、主人公宗助の知人が新橋の傍らでキッチナーと巡り逢ったという話を載せている。「あゝ言う人間になると世界中何処に行っても世間を騒がせるように出来ているようだが、・・自分の過去から引きずってきた運命やこれから自分の将来を取ってキッチナーという人を比べてみると到底同じ人間とは思えない位かけ離れている。そう考えて宗助はしきりに煙草を吹かせた」とあり、宗助の独白に遠回しな表現ながら若干の反骨精神とへそ曲がりな漱石の気持ちをよく表している。

閑話休題

今回はかさね会の忘年会を兼ねての吟行である。半年前から予約をしてくれた幹事の方の苦労に感謝しながら句会は早々に切り上げ、涼亭から眺める夜景を楽しみ、いつもの美味しい懐石御膳にビールと日本酒、それに赤ワインで乾杯となった。

■かさね吟行会■

日時　二〇一九年二月八日（金）
場所　武者小路実篤記念館
集合　京王線　仙川駅　十一時
申込　森岡陽子宛 (03)3712・2835

『酔いの徒然』（八二）

丸山酔宵子

『上野の話題の美術展と東山魁夷展』

１８６８年　新政府軍と彰義隊による上野戦争で寛永寺が焼失し、その跡地が日本で最初の公園となったのが上野恩賜公園である。戦前戦後から、西郷隆盛の銅像、上野動物園、東京芸術大学、重厚且つ権威ある国立美術館群、上野の桜、不忍池、東北からの集団就職の玄関口、浮浪者が屯（たむろ）し、ゲイのメッカでもあった。

東北や信越、上越からの上京の玄関口として特に高度成長期の集団就職の様子が今でもセピア色の風景として思い出される。また貧乏学生時代、スキー列車に乗るために寒いホームで長い時間順番を待っていたことも懐かしい。その当時のアメ横に通ずる上野駅正面口は、昼間も暗く、薄汚い屋台が並び傷痍軍人とか物乞いも溢れていて将に殺伐としたしていた。しかしあの時代から40年、見事に生まれ変わった現在の上野は機能的にそして洗練され清潔に整備されている。

今秋の上野の主力美術館は、貴重且つ重厚な展覧会で連日長蛇の列ができている。「フェルメール」「ルーベンス」そして「ムンク」。フェルメール展の上野の森美術館は、破格入場料２７００円にも拘らず、西郷さんの銅像近くの銀杏並木まで並び、30分以上はかかる。世界に現存する35点と言われる作品のうち9点が展示されている。今回の目玉である「牛乳を注ぐ女」とともに、日本初公開の「ワイングラス」もある。テーブルの上には楽譜、椅子には古楽器のリュートが置かれ、黒い帽子の男性が女性にワインを勧めている様子。飲み干しているワイングラスは、「もっとワインを入れてよ！」と言っているのか、「昼間からもう飲み過ぎよ！」と言っているのか謎めいた不思議な絵である。

ルーベンスは国立西洋美術館で孤高の名作を堂々と展示している。ロダンの彫刻のある前庭にはかなりの人だかりであるが、入場してみるとその建築の荘厳さ、天井の高さやインテリアが、混雑を感じさせない。矢張りルーベンスの絵はル・コルビュジエ建築の世界遺産「国立西

洋美術館」に相応しい。

ムンクの東京都美術館は，入り口付近に人だかりはないが、広い展示会場では入場規制があり20分待ち。世界で最もよく知られる名画の一つ《叫び》が、目の前に展示されている。数点ある《叫び》の由来と意味が解き明かされる約１００点により構成される大回顧展であるが、何か・・・物足りない・・。

一方、場所を変えて六本木の国立新美術館ではボナール展も大々的に開催されていたが、同時に東山魁夷の生誕１１０年記念が開催されている。将に、ムンクの北欧に新境地を求めた風景画とともに奈良唐招提寺御影堂障壁画が特別展示され、長蛇の列はフェルメール、ムンクどころではない。我が日本人にとっては、東山魁夷の静謐さ、忍耐強さ、真摯さが心を打つのであろうか・・。

空を突く銀杏並木の美術館

酔宵子

「江上浩二の独り言」14

江　上　浩　二

社会を変えた光、照明

古来から、人類は火を崇めて来た。それは天から降ってくる隕石などか、身近で頻繁に発生する雷（稲妻）なのか、諸説あるが、言えることは人知を超えた自然界の力（神）としての火があった。火を自分の支配下において、火を起こす道具を開発し、たき火で暖を取り、明かりを得て、人類の生活は大きく変わった。正確にはそれがいつごろだったのか定かでないが、夜の社会生活が人類、民族に生まれ、大きな集団へと発展する糸口の一つになったことも確かであろう。

そんな可燃物を燃やし、火を得ていたのであるが、それが所謂材木類から、燃える水（自然にわき出る石油）や燃える石（石炭）の発見をして、人類は先史時代から、日本で言うと江戸時代後期まで来てしまった。その途中では植物、動物の脂を燃やして、火を得ることも発見した。蝋燭、行燈などは、なじみ深い言葉になってしまった現代である。一つ忘れてはならないのが、燃える水や燃える石の争奪が社会構造を大きく変え、争い、経済の根幹を支配してしまっていることである。

人類が青銅器、鉄器を得るためには、鉱石を高温度にしなければならない。それには燃料を燃焼させて、高温度にして、なおかつ還元状態にして金属を得たのである。精錬技術の登場である。17世紀には精度の良いレンズが開発され、それを使うと昼間太陽光でも高温度が得られる時代にもなって来た。当時はワットの蒸気機関もなく、有効なエネルギー源としては捉えられなかった。

19世紀に電気発電が考案されると、すぐさま電球が発明された。蝋燭、行燈などの燃焼で得た光から、電気抵抗線の発熱・発光による光が生まれたことになる。その現象は燃焼という化学現象から、物理現象の輻射という全く異なった物へ変化した。ちょうど、電球照明が出回り始めようとする時、既に大規模にガス灯が広まっていて、その経済的事業者と競合しなければならなかったそうである。また、エジソンといえども、ガラス玉の中に竹を炭化した線に電気を通した初期の電球では競争に勝てるわけでなく、その後タングステン（金属）に電気を通して、明るさや寿命を大きく改善したものが出回ったのである。調べると、そのタングステンを使おうと開発したのはエジソンの電球と競合していたガス会社だったそうである。

時が流れ、20世紀半ばになると今までになかった半導体というものが材料技術の高精度化（純度や不純物の制

御）で世に出てきて、真空管の機能を微細化したトランジスタと光を得るダイオードやレーザの開発が進んだ。これらは、照明ではなく、コンピュータや通信の分野を大きく発展させる力となった。照明では蛍光灯が１９２６年に考案され、抵抗加熱による発光（電球）よりも効率が良く、安価で市場に出回るようになった。これは金属イオンの励起による紫外線を蛍光体材料で発光するというどちらかというと、少し難しい量子光学物理現象の応用である。20世紀後半になって、大規模照明ではないが、目印や目には見えない赤外線を使ったリモコン装置に発光ダイオード（ＬＥＤ）で得た光を利用するようになった。通信分野で使われている発光半導体は非常に高価で、日常生活の照明には向かなかった。

しかし、21世紀に入って、このＬＥＤが注目され、大量生産され、価格も下がって来て、照明用途に注目された。その理由はエネルギーの利用効率が良く、低炭素、環境に優しいという省エネ、エコに相応しいということだ。今まさに（２０１０年）、２０００―５０００円という価格レベルのＬＥＤ照明が市場に出回り始め、人の生活における照明に、こんな難しい原理に基づいた機器が入り込んで来たわけである。

これらの実現過程では、莫大な研究開発予算が官、民で注がれ、これは全世界の経済戦争の一翼にもなり、希少半導体材料資源の確保や特許などの知財権係争、ＬＥＤ素子が搭載された主要応用製品である液晶ＴＶのメーカ間競争は、世界経済を揺るがす規模になっている。自動車のヘッドランプにもＬＥＤが搭載され、全てエコ、省エネの大合唱に依るもので、自動車産業も競争に絡んできた。

一つ忘れてしまいそうなことを話したい。青色、白色ＬＥＤ照明で、〝冷たい光だね〟とよく聞くことがある。これらＬＥＤ光には、人が温かみを感じる赤外光の成分が決して含まれていないのである。人の目に見える、赤、緑、青の光（可視光）をごまかしで混合・組み合わせて白っぽい光としている。その無駄な発熱成分を抑制して、エコ、省エネを唱えているが、ＬＥＤ 照明機器の半導体デバイスから発生するかなりの熱を放散しなければならない。それは光でないので、暖かくは感じない。機器を触ると熱く感じるものである。

人は、その暖かく感じる照明を求めているような気がする。何しろ、寒い時の焚き火は文句なく最高ですから。

２０１０年５月17日記す

楽しい時間　75

2018年12月31日

山本紀久雄

神にならなかった鉄舟・・・その五

幕末三舟と称されるのは勝海舟と、山岡鉄舟、高橋泥舟であるが、この中で銅像が広く公共の地で建立されているのは海舟のみである。（鉄舟銅像は静岡市の鉄舟寺に松本検氏が個人で贈呈された座像がある）

勝海舟の銅像は、東京都墨田区区役所に隣接する、区役所前うるおい広場の緑地内に、文政6年（1823）生まれの海舟、生誕180年ということで平成15年（2003）に建立された。

墨田区のホームページに以下のように書かれている。

《勝海舟（通称・麟太郎、名は義邦、のち安房、安芳）は、文政6年（1823）1月30日、江戸本所亀沢町（両国4丁目）で、父小吉（左衛門太郎惟寅）の実家男谷邸に生まれ、明治32年（1899）1月19日（発喪は21日）、赤坂の氷川邸で逝去されました。

勝海舟は幕末と明治の激動期に、世界の中の日本の進路を洞察し、卓越した見識と献身的行動で海国日本の基礎を築き、多くの人材を育成しました。西郷隆盛との会談によって江戸城の無血開城をとりきめた海舟は、江戸を戦禍から救い、今日の東京都発展と近代日本の平和的軌道を敷設した英雄であります。

この海舟像は、「勝海舟の銅像を建てる会」から墨田区に寄贈されたものであり、ここにその活動にご協力を賜った多くの方々に感謝するとともに、海舟の功績を顕彰して、人びとの夢と勇気、活力と実践の発信源となれば、幸甚と存じます。

海舟生誕180年

平成15年（2003）7月21日（海の日）　墨田区長　山﨑昇》

この他に海舟銅像は、能勢妙見山東京別院（墨田区本所4-6-14）の山門先にもある。海舟が天保2年（1831）九歳の時に犬に急所を咬まれた際に全快を祈願し父小吉がここで水ごりをしたとも伝えられ、勝海舟翁の銅像が建てられている。

胸像の下には次のように刻まれた銘盤がはめ込まれている。

「勝海舟翁之像　勝海舟九才の時大怪我の際妙見大士の御利生により九死に一生を得その後開運出世を祈って大願成就した由縁の妙見堂の開創二百年を迎へ海舟翁の偉徳を永く後世に傳へるため地元有志に仍ってこの胸像が建てられた　昭和49年5月12日」

大怪我を負った海舟が妙見大士の御利生により九死に一生を得たという話は『夢酔独言』（勝小吉・勝部真長　講談社）に書かれている。

『夢酔独言』を書いたのは勝小吉、海舟の父親であるが、ここで勝家について少し補足したい。参照するのは『をんな千一夜第18話　勝民子「女道楽」勝海舟の正妻　石井妙子』（選択2018年9月号）である。

《時代劇などでは江戸っ子の旗本として描かれる勝海舟だが、代々の武士というわけでなく、江戸に長いという家でもない。

曽祖父の銀一は越後の貧しい農家に生れた盲人で江戸に出てから、金貸し業を営み成功した。当時は、幕府による一種の福祉

政策で盲人に金貸し業を許可していたからである。銀は金で御家人株を買うと、九男の平蔵を武士にした。さらに平蔵の息子の小吉が旗本「勝」に養子入りし、勝子吉となる。この子吉の長男が勝麟太郎、後の海舟である。ゆえに武士としては三代目で、身分も低い。だが、時代は幕末の混乱期。赤貧洗うが如き生活をしていた勝だが、次第に出世を遂げていく。貧しさの中でも蘭学を学び、オランダ語を習得して、書物を通じて諸外国の事情に明るかったことが幸いしたのだ。

ペリー来航という国難にあたって、幕府は身分を問わず、町人階級に至るまで、意見書を募集したが、この時、勝が提出した海防論が上役たちの目に留まった。長崎の海軍伝習所に派遣され、その後、米国へも渡って、さらに見聞を深めた。勝の先見的な考えは幕府側、官軍側の双方から認められ、戊辰戦争の際には調整役として大役を果たし、維新後も伯爵に取り立てられるのである》

海舟の墓は、東京都大田区の洗足池の畔に「勝海舟夫妻墓所」（大田区指定史跡）としてあり、そこの掲示板に次の説明がある。

「勝海舟は、官軍のおかれた池上本門寺に赴く途中で休んだ洗足池の景勝を愛し、明治24年（1891）に別邸を構え、「洗足軒」と名づけました（今の大森第六中学校辺り）。明治32年（1899）1月21日に77歳で没した後、遺言により当地に葬られました。同38年（1905）、妻民子が死去し青山墓地に葬らけれましたが、後に改葬され、現在は夫妻の五輪塔の墓石が並んで建っています。当史跡は昭和49年（1974）2月2日に大田区指定文化財となりました」

ここで気づくのは、能勢妙見山東京別院の海舟銅像が昭和49年建立であり、大田区洗足池畔の勝海舟夫妻墓所が大田区指定史跡に認定されたのも同じ昭和49年である。

どちらも同じ昭和49年という背景説明は簡単である。NHKが勝海舟を12作目の大河ドラマとして、子母沢寛の同名小説を原作に取り上げたことと無関係でないだろう。

主人公の勝海舟役は渡哲也でスタートしたが、渡が肋膜炎に倒れて降板、渡が第9回まで務めた後に異例の主役交代となり、第10回以降は松方弘樹が引き継いだので話題となったこともあり、最高視聴率は30.9%、年間平均視聴率は24.2%（関東地区・ビデオリサーチ調べ）という好評を博したドラマであった。

大田区指定史跡説明掲示板で、さらに気づくのは、「妻民子が死去し青山墓地に葬らけれましたが、後に改葬され、現在は夫妻の五輪塔の墓石が並んで建っています」というところ。

普通の感覚では夫婦である以上、最初から夫の隣に葬られるのではないだろうか。どうして民子は最初に青山墓地だったのか。どのような理由で洗足池に葬られるようになったのか。大田区郷土博物館に尋ねると「詳しくは分からないが昭和20年頃に青山から移された」という回答であった。このところを次回でもう少し詳しく続けたい。

絹の話（99）

「アトリエトレビ」今泉雅勝

ムガシルクを訪ねて　アッサム紀行

1月のアッサム

インドアッサムの州都ゴーハティーは乾期で風は肌に気持ちよく、少し北上すれば幸せな国ブータンです。この地域はアジア各地域からの人種のルツボで、特に２００年前からイギリスによる紅茶栽培労働者の移住が、それを一層複雑にしています。機織りの村々ではインドの公用語のヒンドウー語も英語も通じない事ありました。

この時期、村々は祭りのシーズンで、着飾った女性が三々五々行き交う風情は一幅の絵を見るようでした。郊外では夕暮れに人と牛が一緒に家路に急ぐ光景もまた心温まる風景でした。

しかし、州都の周辺のインフラ整備は進んでおり、幹線道路は立体交差で信号がないのに驚きました。それでも車の洪水はすざましく、割り込み、警笛の喧騒は昔のインドと変わりませんでした。

一番驚いたのは1週間のインド滞在の期間に戸外でタバコを吸っている人を1度も見かけなく、路上の吸い殻など見かけませんでした。

ムガシルクとは

ムガ蚕の圃場　ソムの木

ムガの熟蚕は木から降りて来る

野蚕絹に興味ある人なら誰でも一度は手にとってみたいと思う垂涎の絹です。

それはインドのアッサム州で少量しか採れない黄金に輝く希少な絹です。

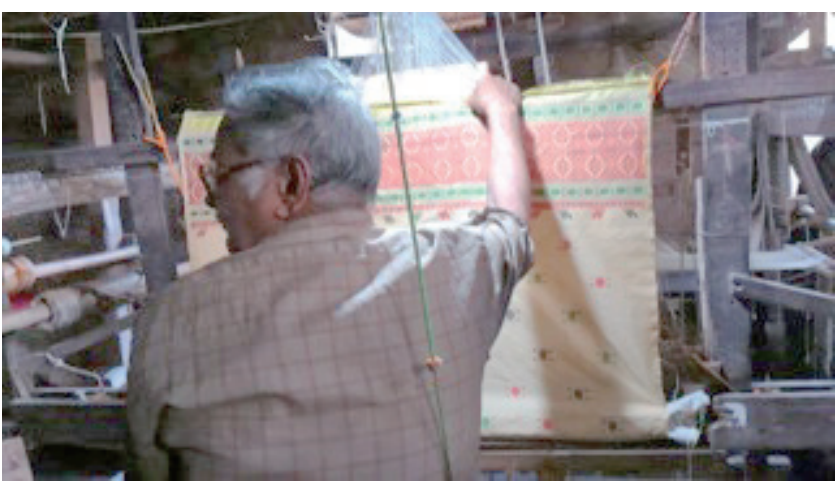
古くからインドではマハラジャなどの高貴な人々に愛用されて来たようで、一般には祭りなど晴れの日に着用され、女性にとってムガのサリーを着られる事はステイタスなのです。緑樹の下をムガのサリーをなびかせて、日差しに輝く姿はインド版の「綺麗」ではないでしょうか。

ムガのサリーはゴワゴワと薄板のように織られている物が多いのですが、長年洗濯を繰り返し着用すると、しなやかで品のよい、冴えた金色になってゆきます。

それには、その人なりの日々の生活、生き様が投影され、織端を縫い止めないで使い、ほつれた糸はお寺に喜捨するのです。これで僧侶は糞掃衣（ふんぞうえ）を作るのだそうです。

インドでは布も人と共に年経て風合いも移ろい、生々流転、土に帰るまで、留まる事の無い物が浄布で、留まる物は不浄と考えられ、インド人の誰もが持つ共通の哲学です。ムガのサリーはその象徴的な物なのです。

ムガの繭と糸、布



ムガを織る男性（機織りは男の仕事）

ムガ蚕は休眠しないので通年採る事が出来ますが、インドの春先は紫外線が強く、採れる糸は濃金色で、冬の糸は淡金色になります。日本人の肌には後者が喜ばれます。特に女性は男性より色の識別能力が優れていますが、その内30％強の女性が太陽光に近い光源のもとで、とりわけ美しいと感ずるようです。ところが白色ＬＥＤ光源では感度は低下して、反応は鈍くなります。

ムガシルクの特徴

ムガシルクは貴重というばかりでなく、優れた機能性を持っています。紫外線反射吸収が他の絹より顕著で、インドの春先の50℃にもなろうかという強い熱射から身を守るには最適と言われています。

静菌性、保放温性、保放湿性、弾力性等も勝っています。糸も細いので肌触りが柔らかく、着用するとなんとも言えない安堵感に包まれます。

ゴーハテイーから北40㎞北の村のムガシルクの機屋で重厚に織られたムガシルクのカーペットに出会いました。なんとも表現出来ないソフトな気持ち良さに旅の疲れも霧散して、束の間、竜宮に誘われた浦島太郎になった気分になりました。あまりの高価さに買うのを躊躇していましたら、私の帰る頃にはネットを通してニュウジーランドから注文が入ったと言われました。

次回来るときここでムガシルクのシーツを作り、一人でも多くの人に『幸せ』を提供しようと決心した次第です。

トレビオリジナルムガチュニック

ムガシルクのカーペットを持つ筆者

漢詩研修（二十八）

千代田岳精会　平井茂行

母を奉じて嵐山に遊ぶ　　頼山陽

嵐山に到らざること已に五年
最も忻ぶ阿母と衾枕を同し

万株の花木倍鮮妍
連夜香雲暖かき処に眠る

不レ到二嵐山一已五年
最忻阿母同二衾枕一

萬株花木倍鮮妍
連夜香雲暖處眠

【作者】頼山陽（一七八〇～一八三二）江戸時代後期の儒者。名は襄（のぼる）、字は子成、山陽の外に三十六峰外史と号した。芸州（広島県）竹原の人。父は惟完（いかん）（号春水）といい、安芸藩の儒者。山陽はその長男で、安永九年（一七八〇）大阪の江戸堀に生まれ、広島で育った。七歳のとき叔父頼杏坪（きょうへい）について読書をはじめ、十四歳のときに次の詩を詠じ、父の親友柴野栗山（りつざん）をして驚倒させたほど、詩文について天才をもっていた。

十有三春秋、逝者（ク）已（ニ）如（シ）レ水（ノ）。天地無（ク）始終、人生有（リ）生死。安得（シ）ン類（テ）古人（ニ）、千歳列（スルヲ）中青史（ニ）上。

この詩を見て、栗山は『通鑑綱目』を読むことを勧めた。二十歳、藩の儒医御園道英の女淳子（じゅんこ）と結婚したが、不行跡が続き、翌年九月、家を出奔して京都に走り、脱藩の罪により捕えられて二十四歳まで四年間自邸に幽閉され、この間読書と修史に従事し、文化四年（一八〇七）二十八歳のとき、『日本外史』の稿が成った。小石氏の養女梨影を娶って家庭を作った。住居は転々したが、文政五年、京都の鴨川の西に新邸を営み、これを水西荘または山紫水明処と称した。文政十年（一八二七）、『日本外史』を前老中松平定信の命により進献し、盛名一時を圧するに至った。天保三年九月二十三日病没、享年五十三歳。

【通訳】嵐山を五年もの間訪れていなかったが、いま来てみると、万株もの桜の木が花をつけて、ますますあでやかで美しい。何よりもうれしいことは、毎晩、母と枕を並べ、この桜の花の香しい雲の中に包まれて眠ることができることである。

芭蕉は、恋の名手だった？

中屋保之

芭蕉雑記（大正十二年～十三年）　芥川龍之介 抜粋

十二　詩人

蕉風付け合に関する議論は功氏の「芭蕉研究」頗る明快に述べられてゐる。尤も僕は樋口氏のやうに、発句は蕉門竜象を始め蕪村も甚だ芭蕉には劣つてゐなかつたとは信ぜられない。が、芭蕉の付け合の上に古今独歩の妙のあることはまことに樋口氏の議論の通りである。のみならず元禄の文芸復興の蕉風の付け合に反映してゐたと云ふのは如何にも同感と云はなければならぬ。

芭蕉は少しも時代の外に孤立してゐた詩人ではない。いや、寧ろ時代の中に全精神を投じた詩人である。念の為にもう一度繰り返せば、芭蕉は少しも時代の外に孤立してゐた詩人ではない。最も切実に時代を捉へ、最も大胆に時代を描いた万葉集以後の詩人である。この事実を知る為には芭蕉の付け合一瞥すれば好い。芭蕉は茶漬を愛したなどと云ふのも嘘ではないかと思はれるほど、近松を生み、西鶴を生み、更に師宣を生んだ元禄の人情曲尽してゐる。殊に恋愛を歌つたものを見れば、其角さ木強漢に見えぬことはない。況や後代の才人など空也の痩せか乾鮭か、或腎気を失つた若隠居かと疑はれる位である。

狩衣を砧の主にうちくれて　　路通
わが稚名を君はおぼゆや　　芭蕉

宮に召されしうき名はづかし　　曾良

手枕に細きかひなをさし入て　芭蕉

殿守がねぶたがりつる朝ぼらけ　千里

兀げたる眉を隠すきぬぎぬ　芭蕉

足駄はかせぬ雨のあけぼの　越人

きぬぎぬやあまりか細くあでやかに　芭蕉

上置の干葉きざむもうはの空　野坡

馬に出ぬ日は内で恋する　芭蕉

やさしき色に咲るなでしこ　嵐蘭

よつ折蒲団に君が丸くねて　芭蕉

是等の作品を作つた芭蕉は近代の芭蕉崇拝者の芭蕉と聊か異つた芭蕉である。たとへば「きぬぎぬやあまりか細くあでやかに」は枯淡なる世捨人の作品ではない菱川の浮世絵髣髴たる女若衆の美しさにも鋭い感受性を震はせてゐた、多情なる元禄びとの作品である。「元禄びとの」、――僕は敢て「元禄びとの」と言つた。是等の作品の抒情詩的甘露味はかの化政度の通人など夢寐にも到り得る境地ではない。彼等は年代を数へれば、「わが稚名を君はおぼゆや」と歌つた芭蕉と、僅か百年を隔つるのに過ぎぬ。が、実は千年の昔に常陸少女を忘れたまふな」と歌つた万葉集中の女人よりも遙かに縁の遠い俗人だつたではないか？

《参考文献　インターネットの電子図書館、青空文庫》

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田勇気

2018年1月7日

早くも1週間

年が明けた途端
瞬く間に1週間が過ぎました
この繰り返しが
1年をあっという間に感じるんでしょうね(笑)
年末年始はどうでしたか?
体調を崩さず過ごせましたか?
相変わらず
咳の風邪
りんご病
胃腸炎
が流行っていますね
金属は菌が長生きします
ですので
公共の場の金属には
気をつけて下さいね
手洗い
除菌シート
アルコール
を上手く使い
引き続き身体を守って行きましょう

2018年1月9日

マスクを活かす

今日は北風で
気温以上に体感温度が低く感じますね
空気も乾燥し
ウィルスも活発になってきます
気管に湿度を与えてくれるマスクが
重要になってきます
ここで改めて
マスクの着け方を
書きたいと思います
①半分に折ります
②それを開き縦に開きます(鼻と口の方向にひく)
そうする事で
しっかり広がって
顔にフィットしやすく
マスク効果があがります
さらに飴やガムで唾液を増やす
今まで本田式では
マスクの表面にイオンスプレー
の噴霧をお勧めしていましたが
今回は
アロマオイルの噴霧もお勧めします
マスクアロマという
気管と粘膜を強くするといわれる
配合のスプレーがあるんです
これなら匂いも良いですし
菌を身体で防ぐという考えです
外側と内側のダブル使いも良いかもしれません

「新しい経験」

大橋望彦

送迎車のくるのをヘルパーの宇佐美さんと待っている（この時、ヘルパーさんが、朝食を作るのを手伝いに来て呉れていた）その時である。急に目の前がボヤケたと思った瞬間、スーッと目の前が判らなくなり、後はどうなったのか・・・・どうやら夢でも見ている様で、何んと表現したらば良いやら、表現しようにも何を表現したいのかすら判らない状態である。

どこかゴルフの練習場の様な処で歩いているが、ゴルフをするでもなく只見ている丈でボーとしている。その内に、いつの間にか大きな建物の階段に座って居り、その階段にまつわりついた植物が何というものかを一緒懸命思い出そうとしているが中々想い出させないでいる。この様な事も全て夢うつつの状態なのである。後で考えてみれば、これが夢でもなくむしろ今までに経験したことも、見た事もない景色であることで、あの世の景色であったのかも知れない。

この後で救急車のサイレンが聞こえたり、慌しく動く人の群があったりした様だがあまり確然としない。どの位時間が経過したのか、急に頭の廻りがぐるぐると廻っており、何とも気分が悪い状態が続いていたが白衣を着た男性が「こゝはどこだか判りますか」と云っているのがかすかに聞こえた様であった。どう考えても何処だか見当がつかないので、判らない旨を云うと「こゝは青梅市立総合病院の救急病棟である」と教えて呉れた。

それでようやく何か事故でも起こしたのか否かが判って来た。しかし、それも束の間、またボーっとして寝た様になってしまった。

どの位寝ていたのか判らないが、眼を開けると周囲がグルグル廻っている。この間に、ドクターは妹の弓子に様態の説明をし生きるか死ぬか今の処判らないが、失神した際に頭を強く打ったので、後壁下内出血のため脳内

出血で直ちに血液を吸出しないと死んでしまうのでこれから直ぐに手術を行なうといった話をしていた様だ。何時間経ったのか、ようやく周囲の容子が判ってきて、白衣の男性が、これは何本の指ですか?とか、時計を指して「今何時ですか?」とか質問していた。どうやら正確な答えをした様で手術がうまく行った様である。

白隠さんの和歌

沼津　鈴木孝雄

「駿河には過ぎたるものが二つある　富士のお山と原の白隠」と讃えられる白隠禅師慧鶴（一六八五―一七六八）は、現在の沼津市原に生まれ、地元で修行の後、二十歳で諸国行脚出る。正受老人や白幽真人などから悟りに至る教えを受けた。その後、三十二歳で原に戻り、松蔭寺の住職となる。以来松蔭寺を拠点とし八十四歳で遷化するまで各地を巡錫。その間、要請を断り、本山の住持にはならず、原といった地方の寺の住職として布教を続けた。

白隠禅師の教えを受けた人は、僧侶から大名、大衆と大変幅広く、地元では「白隠さん」と親しみをもって呼ばれている。白隠禅師の貢献は、禅の教えばかりでなく、「夜船閑話」や「遠羅天釜」などの著作、多くの禅画、墨を遺している。このように、白隠禅師の仏法での功績は偉大で、五百年に一人の僧と讃えられ、臨済宗中興の祖と言われている。平成二十九年は二百五十年忌に当たり、各地で催しや展示会が開催された。達磨の禅画は迫力に満ち圧倒される。禅画の賛は機知に富んでいるが、正直なところ難解である。

白隠禅師は、庶民にも分かるように、お経も「白隠禅師座禅和讃」のように和文で書いてくれた。しかし、現代人にはそれでも内容の理解には解説が必要である。

白隠禅師の和歌はあまり知られていない。和歌なら、現代人にも分かりやすいかと考え、調べてみた。白隠禅師の和歌集『藻塩集』が吉澤勝弘訳注の『白隠禅師法語全集第十三冊』に収められており、そこから筆者の心に響いた歌を数首紹介する。

愛別離苦といへる題にて、

逢ふ時はわかれ路もあり同じくば
身にそふかげとなる友もがな

體空観のこころを、

雨あられ雪や氷をそのまゝに
とかねどおなじ溪河の水

尊師にとぶらはれて、

恥多き年とおもへどながらえて
わだちの水にうつる月影

生死の海邉を明けがたに通りける、二首、甲州に生死といふ所あり、爰に湖水あり、

月はさし水鶏はたゝき風はおす
障子のさとの明けがたの雲

夏山のみどりは水にひたされて
浪のそこにも雲かよふなり

或る人、歌よみて死後の斷滅不斷滅を問けるかへしに、

後の世のありやなしやの迷い路を
とふ人ぞしる逢てたづねよ

御津磯夫短歌鑑賞　14

「月虹」　鮫島　満

不老不死の上寿は百二十歳にして我は中寿を過ぎたるばかり

『月下の華』昭和五十九年

長生きを不老長寿というが、長寿とは何歳以上をいうのであろうか。ふつうの人は、そのようなことは疑問に思わず、たとえば男性だと傘寿、女性だと米寿ぐらいを長寿と言って済ますのであろうが、医家である作者はもう少し具体的に考えるのであろう。

すると、世の中には百二十歳の人がいることを思うとそれは極めて珍しいことで、「長寿」というあいまいな言葉で言うよりも最上級の「上寿」というのがふさわしいと思うのである。一旦、こうして新語を造ってみると、八十二歳の自分のことを周囲の人は長寿だと言ってくれるが、あの「上寿」に較べると自分は「中寿」に達したにすぎないと、これも造語で言ってみるのである。

この歌が詠まれた昭和五十九年ごろの日本では百歳を超える人は非常に少なくてニュースになっていた。そもそも「古来稀なり」ということで七十歳を「古稀」と言い出したのは千年以上も昔からのことに違いなく、それは作者が八十二歳のころにも通じていたはずである。百どころか百二十となると、七十歳が稀だという「古稀」は本来の意味のない言葉になったのであった。

因みに、厚生労働省の資料によると、国内の百歳以上の人数は、

一九六三年　１５３人
一九八一年　１０００人超え
一九九八年　１００００人超え
二〇一五年　５００００人超え
二〇一八年　６９７５８人

となっている。

「氷魚」のことから（217）

岡本八千代

もう一度学生時代にもどったような気分になって、独り私のこもり部屋にこもった。

そして、子規を思い、今の私の家族を思い、とくに夫のことを思い、なにかしらごちゃまぜの感情が湧いてくる。——。

この感情が、短歌をつくらせる大切なものかもしれないと思いつつ。——。

机の上に、谷崎潤一郎の「陰翳礼讃」が書き抜いてある。……。

○「私はしばしばあの障子の前に佇んで、明るひけれども少しも眩ゆさの感じられない紙の面を視つめるのであるが、」—略。

○「春夏秋冬、晴れた日も曇った日も、朝も、昼も、殆どそのほのじろさに変化がない。」

○「そう云う時、私はその夢のような明るさをいぶかりながら眼をしばだゝく。」

私も、このほのじろさに感じて、陰翳、つまり、光のあたらない暗い部分、影の美しさにとらわれてきたつもりでいる。故に、当った光の面ではなく、むしろ、その影の美しさを、短歌創作にも、いや、自分の生活してゆく中にも感じながら暮してきたような気がする。ちょっとネガティブかも。

さて、２０１８年、12月4日の読売新聞に、「折口信夫・静かなブーム」という大きな見出しの文があった。又の名を釈迢空（しゃくちょうくう）の名で、活躍されてきた有名な人だ。作家でもあり、歌人でもあった人だ。つい最近、迢空先生に師事された市川良輔という人の歌集「たまゆら」を読んで、返したばかりだった。（主人の教え子の近藤司さんが持参されて、読ませて下さった）。「たまゆら」の市川さんは、１９９０年に釈迢空の門下生となった人で、どことなくアララギ的なところがあって、唯真的に歌われていたと感じた。

迢空は、明治42年（１９０９年）にアララギの人々と知り合い、その後に12年の間、短歌の理想としての「ますらをぶり」を唱道した人と言われていた。この丈夫ぶりは、日本の昭和初期に当たるので、男として、それを美徳とした憧ればもあったのではないか。

〝生きて我還らざらむと、うたひつゝ、兵を送りて家に入りたり〟迢空

After sending off
Soldiers who were singing,
〝We don、t expect to return alive,〟
I went back into my house.

この一首の訳も、ドナルドキーン著・訳は新井潤美に依る。

当時の日本の国全体のことを思うと、男性ならではの高揚ぶりは仕方のないことだったろうと私は思う。私もかつては女学生の時、竹やりを鉄砲として担いで、上官に向かって、「捧げ銃（つつ）」をしたことを思い出す。その時、豊川海軍工廠の女子挺身隊の一員でもあったことを。……。

運命の流れをしみじみと思いつつ。次号へ。

編集室だより【二〇一八年十二月】

今泉由利

○日々、新しいことにたち向ってゆかなくては〝今〟と感覚がずれてしまう。めんどうだけれど変化を感じていなければ、と思う。
漢詩のクラスは、自身より古い時を思い出すことになる。自身の心が知らなかったことに揺れ、思い出すことに揺れ、個人的な先祖を父を母を思うに至る。
漢詩を習う、ということに出逢えたこと、本当にありがたかった。

○「母を奉じて嵐山に遊ぶ」頼　山陽
漢詩の内容が心に染み、大きな声を出すのに腹筋が反応している感覚、このごろわかってきた。吟じるとは、身体中、怠けていられるところがない。

○清澄庭園へ俳句の吟行。
一年の最後の吟行を、清澄庭園の池の中に建つ緑青の屋根の夜の涼亭ですることになって久しい。
平安の時にタイムスリップしてしまったような、夢心地の空間になります。
清澄庭園にゆくと、まず、本当の隅っこ、全員が見過してしまうような所に、お顔いっぱいに笑っておられる小さなお地蔵様が、変わらず迎えて下さいます。お地蔵様に助けていただいて、私も笑顔になってしまいます。

○自身の描いた絵を、日本式に表装してみようと思いたち、京都からいらして下さる先生のもと、始めたのだけれど、これは、尺寸の世界、和紙に描いたのではない、洋紙に描いた絵では無理なことを知る。何もかも…と図々しくなってはいけないと挫折寸前。

○エアコンとガスストーブとで、今までの年月をのりきってきたけれど、ガスを点けることを、なるべくなくしようと思いたち、ガス・ストーブの使用を止めた。今までのエアコンだけになってみたら、〝寒くて寒くて〟一人居て、幾つかのエアコンを使用するのも気に入らないから、最新のパワーアップしたエアコンに取りかえた。これで人並に暮せます。

○三河アララギ誌の発送を、父母の時のように・・・そのままを続けようと努めてきたけれど、一人ではとても無理と思うことが多くなり、東京に移してからの三河アララギ誌の印刷をして下さっている「桜創美」に、刷り上りをそのまま発送していただくことをお願いした。心よく応じて下さり、専門的に発送して下さることになりました。
皆様、無事お届け出来ておりますでしょうか。何なりと、ご意見をいただけますよう。

○幾つかの忘年会にパワーを得、増々元気に、三河アララギ誌を続けさせていただきます。

野菜・まんだら　（12）チェリモヤ・バンレイシ・アテモヤ

○学名：Annona Cherimola バンレイシ科の果実。
○原産：南アメリカのペルー、エクワドル、コロンビア南部・・・。アンデス山脈、2000m近辺、日中20℃、夜間10℃ほどで栽培される。
○チェリモヤが属するバンレイシ科は釈迦頭、牛心梨など、多数。
○チェリモヤとバンレイシの交配種を「アテモヤ」と名付けたり。
○チェリモヤには、血液を作る働きをする「葉酸」豊富に含まれ、貧血予防に、高血圧予防の「カリウム」も多く含まれる。タンパク質の代謝に、ビタミンB6。風邪の予防に効果があるビタミンC。
○アルゼンチンに住んでいた頃、チリの友人が持参して下さりその味を知り、こんなに美味しいものがこの世にあるのか・・・と思った程。
○気付くと、ブラジルの市場、カリフォルニアの市場、山盛して売っていて、沢山買って帰ったり、チェリモヤ狂いをしていた。日本でも時には見かけるけれど高価、良い条件ではなかったり・・・。あまりに好きだから、絵を描いた。三河アララギ２月号の表紙にしました。

今泉由利

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一一四-〇〇二二
東京都北区王子本町一-二六-六-A
TEL（〇三）五九二四-二〇六五
◇URL　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　yuriimaizumi@jcom.zaq.ne.jp
◇編集・発行　今泉由利・森岡陽子
◇三河アララギ誌は毎月発行します。
◇会員・今まで会員の方。希望される方。
◇会費制　廃止。
◇新しく購読を希望される方　一ヶ年五千円。
◇振替口座　〇〇八三〇-六-五六二二九
◇原稿送付先　〒一一四-〇〇二二
東京都北区王子本町一-二六-六-A
◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。